テーブルウェアーの意匠改善並びに試作研究

（炻器の調味料入）

A Study of the Improvement of Table Wear Design and it's Manufucture

藤　本　　猛

1．まえがき

この研究は輸出雑貨意匠改善研究として行ったものであるが，最近の製陶技術については著しいものがあり，輸出陶磁器には各品目に意匠上の諸問題があるが，特に食器類（ディナーセット等）は輸出雑貨の雄として現在，将来に大きな関心をもたれている品目である。

品質，意匠，価格等にはいろいろの問題があり常に研究されているが，現在米国市場においては品質的に欧州製品に劣らぬ製品でありながら関税や意匠あるいは宣伝などの問題から，欧州製品中特に高火度磁器，軟質磁器（ボンチャイナ）は米国人の間に高級品として観念づけられているのに対し日本製品は中級品以下のレッテルを貼られている現状である。高火度磁器や炻器類の先進国である欧州製品に対して一朝一夕に解決できない問題点もあるが，今日我が国には多くの優秀なる美術陶芸作家，陶芸研究家がいるのに対し陶磁器専門のデザイナーの数は少なく，大きな陶磁器工場には意匠部門をもっていても営業政策上から，優秀なる品質，製作技術をもちながら技術面，販売面より意匠が左右され又零細小企業においては意匠面の認識がなされていないのは残念なことである。

2．概　　要

ニューヨークの高級工芸品を取扱っている著名なる店で近時北欧製品が圧倒的に多く，その中でスエーデンのグスタフスベルグ，コペンハーゲンのサクソボーの作品は申合せたようにマット釉の炻器が大部分でその薄手な成型技術や，あざやかな落ちついた釉薬は同じ炻器である陶管材料でできたものとはとうてい思われない。締焼きのできるその焼成温度は見かけより低く色もあざやかに出るので炻器の産地をもつ我が国で今までどうしてこの様なスタイルが生れなかったか不思議に思われる。我が国では各地に炻器の材料を多く産していて代表的なものは三重県四日市市，滋賀県信楽町，岡山県伊部，愛知県常滑市などがある。炻器といえば粗雑な焼物と思われがちだが常滑市では昔から土管の町といわれる程陶管や陶瓶を多量に産して来たが締焼きされた甕類は吸水性がなく堅牢で実用価値に富んでいた。我が国の地方材質中特に炻器類は各地に多量に産しているが，現在北米市場あるいは我が国市場に於ても雄飛する北欧の高級炻器類を見れば優秀なる製陶技術，材質を持ちながらこの面の用途開拓が全く進められていないことは残念なことである。

特に各地に産する茶器を中心とした工芸品は地風や色調が美しく精密なテキスチャーを持った地方材質と思われる。ここに紹介する調味料入れは炻器の精密なテキスチャーを生かし近代生活に適した輸出製品としてデザインを試みた日本地方伝統技術の近代化に伴うデザインと試作の一品目である。

3．意匠と製作工程

一般に最近のデザインは，フォーマルなディナー，セットのほかにカジュアル，ウエアーと称するグラフィカルなものが好まれ，形態，パターンともフォーマル・ウエアーとは趣きを異にし，用途を現代生活の合理性に合せるとともに形態もパターンも比較的自由に展開させ，販売方法もいわゆるオープン・セールと呼ばれる個々売を利用出来るよう考慮されている。フォーマル・ウエアーと異り時の流行に左右されやすいのが特徴である。従って使われる材質もやや程度が低く価格も手ごろだが，中には単に形態とパターンをグラフイカルにしたという

だけでなく，より高度の用途性そのものに新しさを加えたもの，又フォーマル・ウエアーの仕上りに似せてごく品よくモダンさを目立せないデザインもあり一概にカジュアル・ウエアーは安直な手軽な食器とは言いがたい。

(イ) デザインポイントとしては海外の炻器に比べ日本炻器は品種の開拓がない。

(ロ) 従来から製作されている手法はロクロ成型であるが技術者不足，コストダウンを計るため特に鋳込成型を産地にもたらすと共にそれに合致した条件を基にデザインを試みた。

意匠の設計に当っては，先づ陶磁器製作工程上から鋳込成型法，収縮，焼成上の歪等多くの制約があるが炻器の素地，釉薬，製造技術等を基盤として意匠の面より堀り下げた研究を行った。

ロクロ，鋳込成型についてはそれぞれの長短があるが特に鋳込の石膏割型の場合は形態的に横割，竪割型はバリ線が数本はいる場合がありこのバリ跡について目立つ位置につくものもありこの部分の仕上げが製作上の難点とされる。横割の場合は多少のバリ跡は鋳込成型による炻器の地肌からして意匠面から問題にはならず又成型面からも円形の場合ロクロ使用も可能なものであれば仕上げは容易であり問題とはならない。然しながら竪割型は製作上新品種に対する不馴，コスト高製作工程上バリ跡処理については難点があるが安易な製作法に譲歩しデザインの意図を犠牲にする事は極力避けるべきであり割型のバリ跡処理については

① 極力修正加工して計画通り仕上げる

② ある程度バリ跡が出来ても意匠面より見て差支えなければ従来通りの加工成型方法を行う

③ バリ跡を応用して装飾的効果を出す

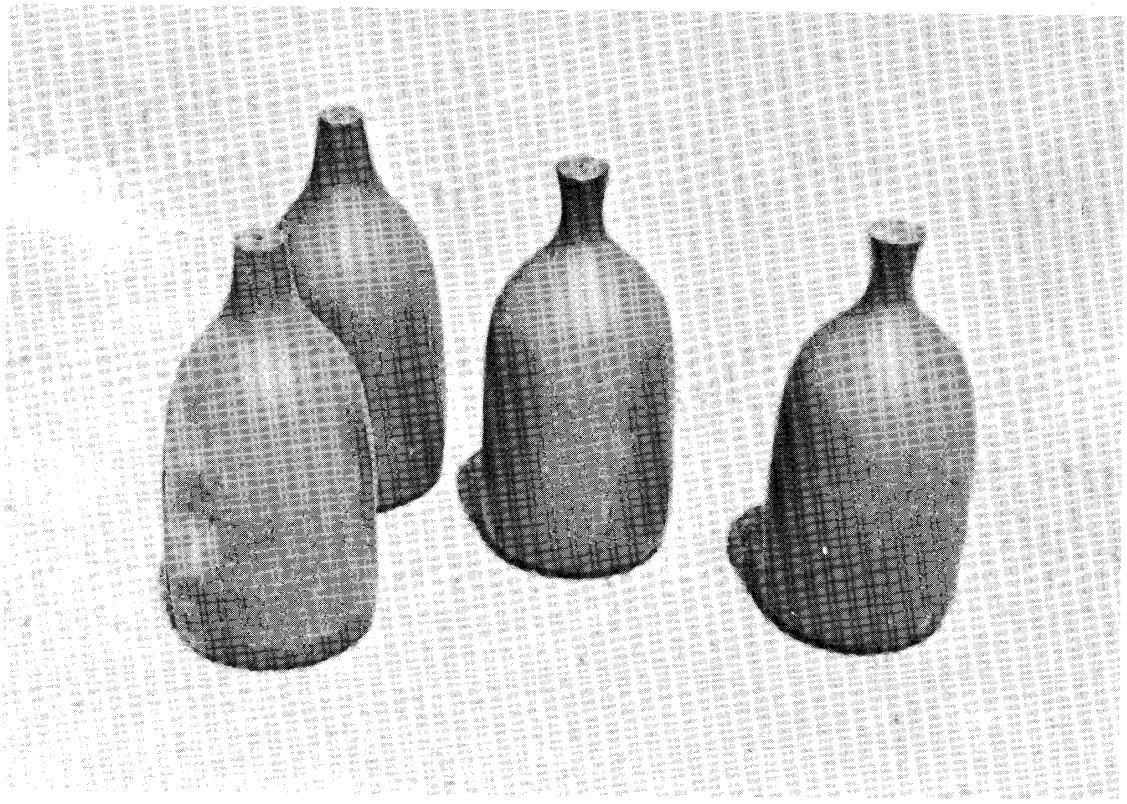
等が考えられるが試作の結果は目立つ位置につくものもあるが（図面№2参照）がこの部分の仕上げのむづかしさについては①②の方法によりほとんど欠点は認めらず材質感を生かし鋳込成型無釉艶けし仕上げの柔かな効果を出す事が出来，（写真参照）計画通りのデザインを試作する事が出来た。

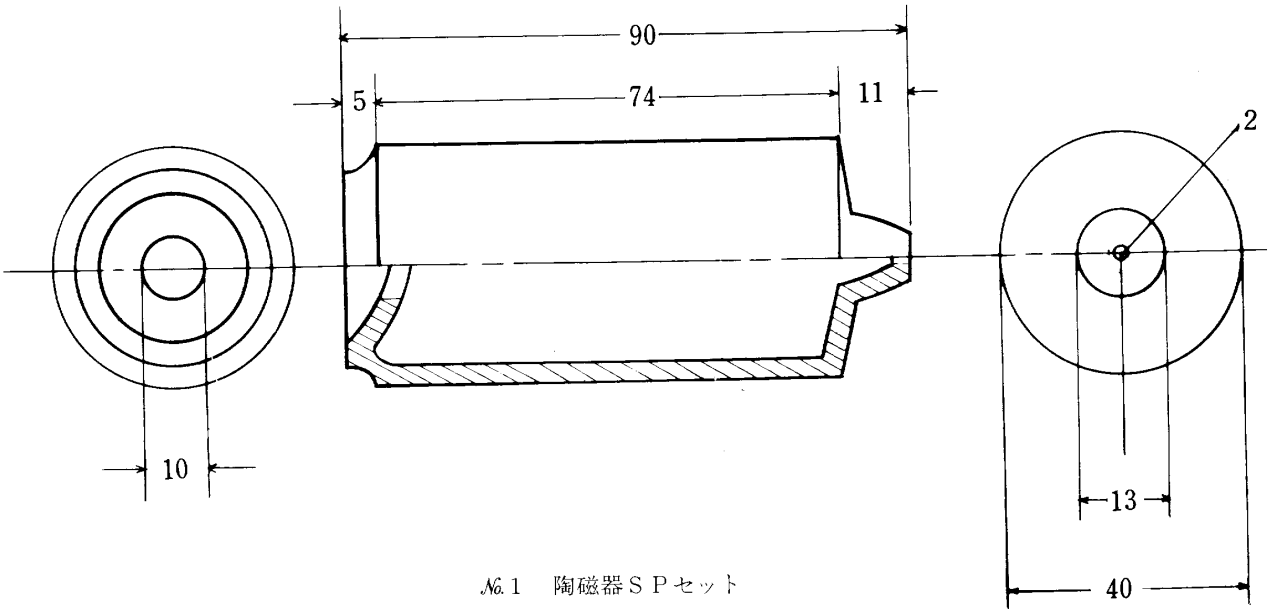
今後炻器のもつ特異性ある地方材質と優秀なる製陶技術と相まって，用途品目の開拓および意匠面からの創意発案を行えばグット・デザインとしての国際市場への進出品目としての可能性も充分もたれる素材である。

以　上

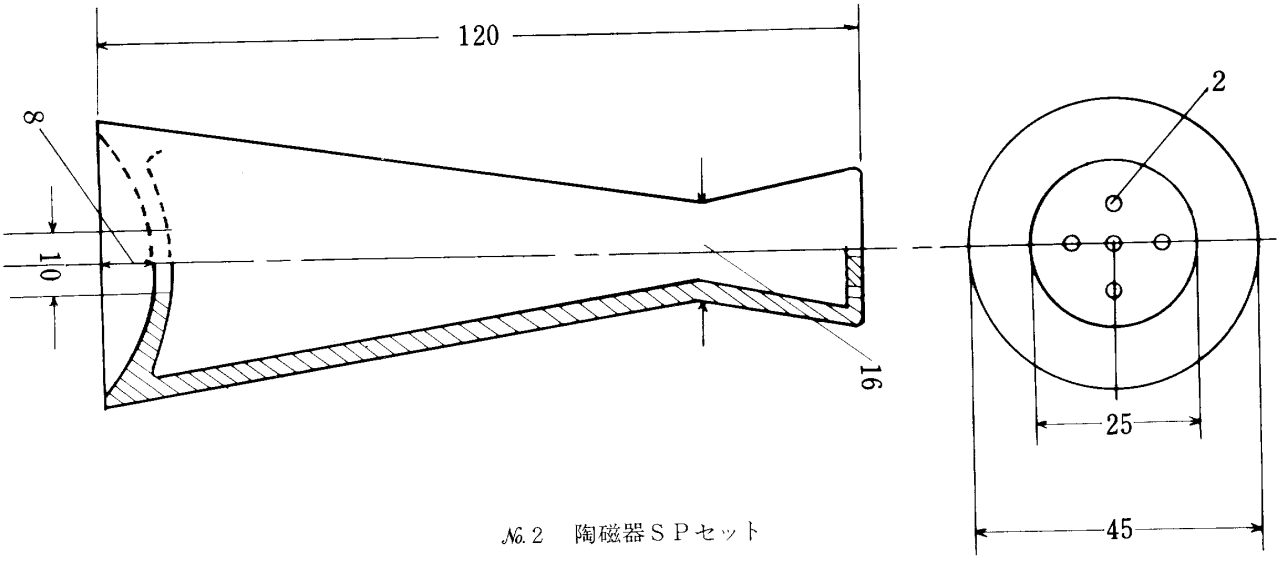
参考文献

デザイン・ノート（I.A.I）
日本貿易振興会マーケティング・シリーズ
日本産業デザイン振興会海外資料
各社カタログ・アンケート解答など

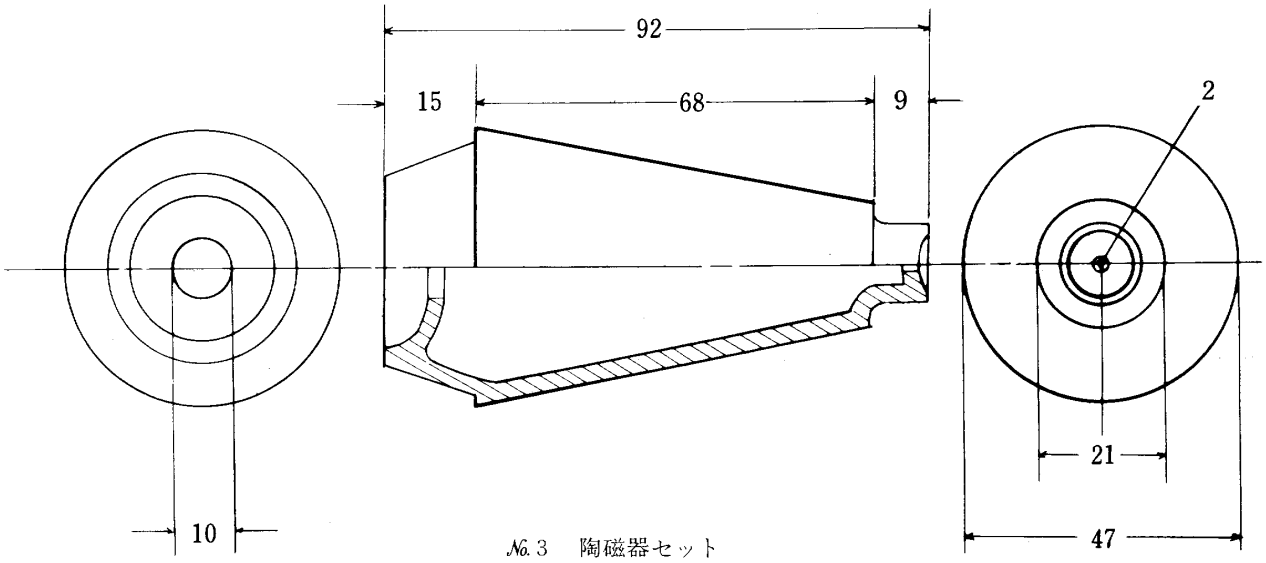




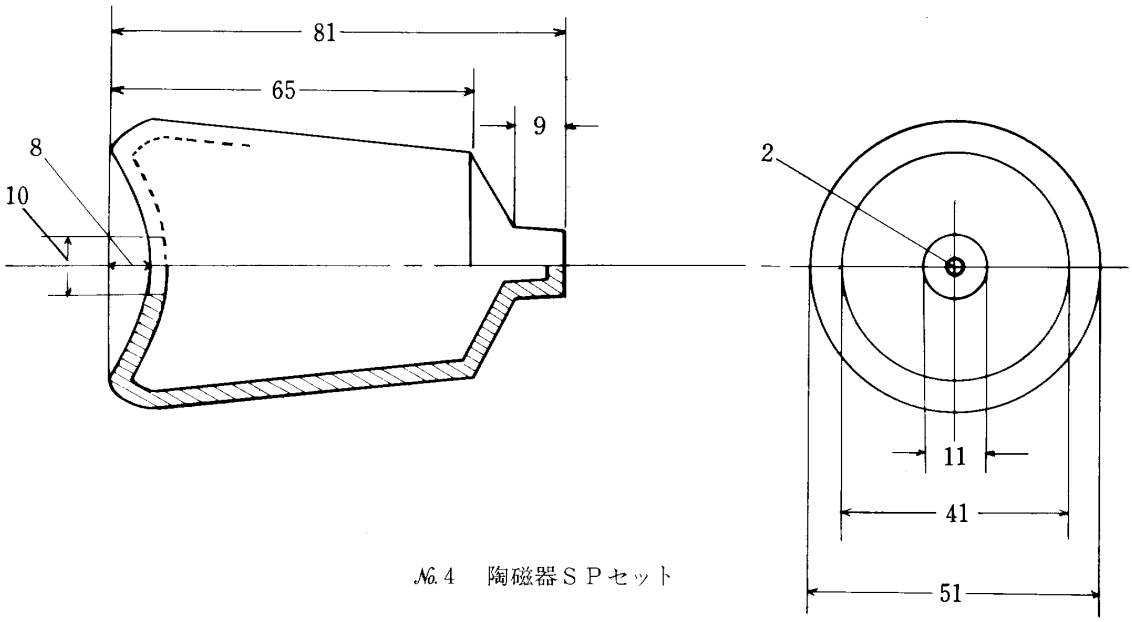
№1　陶磁器ＳＰセット



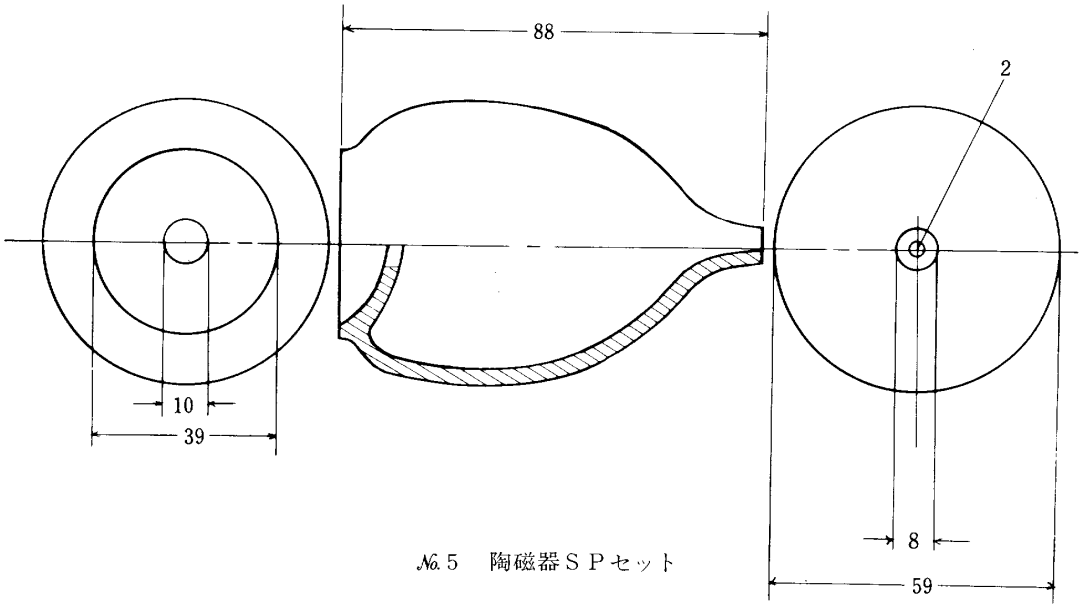
№2　陶磁器ＳＰセット



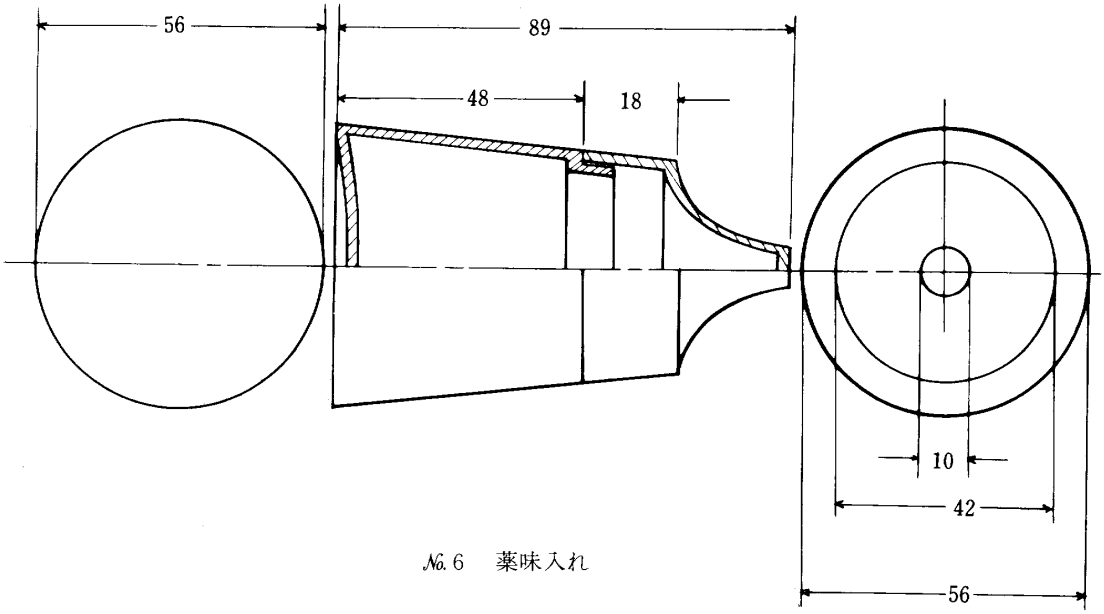
№3　陶磁器セット



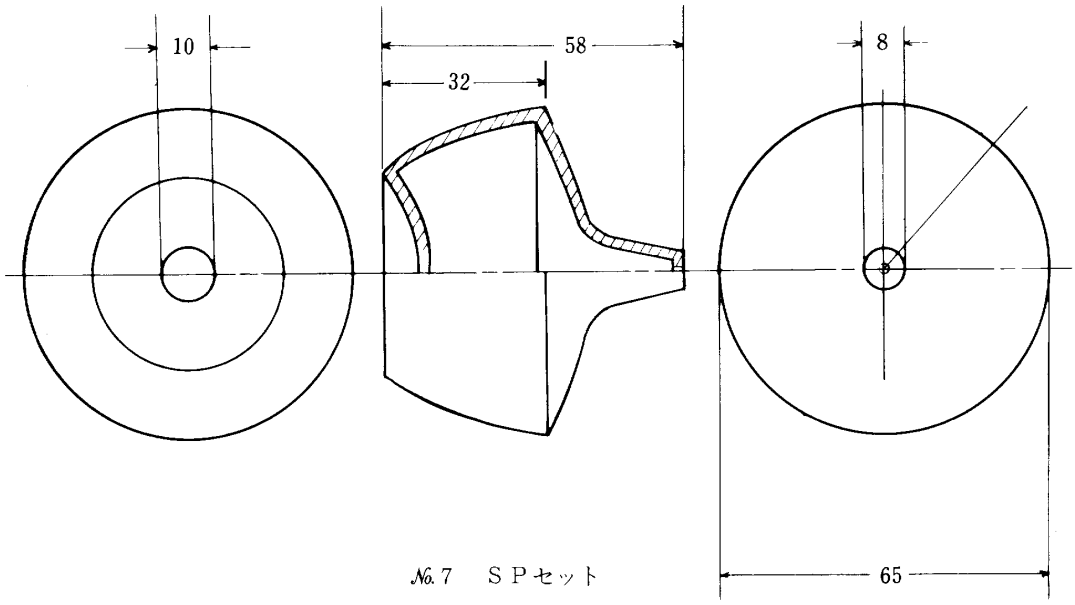
№4　陶磁器ＳＰセット



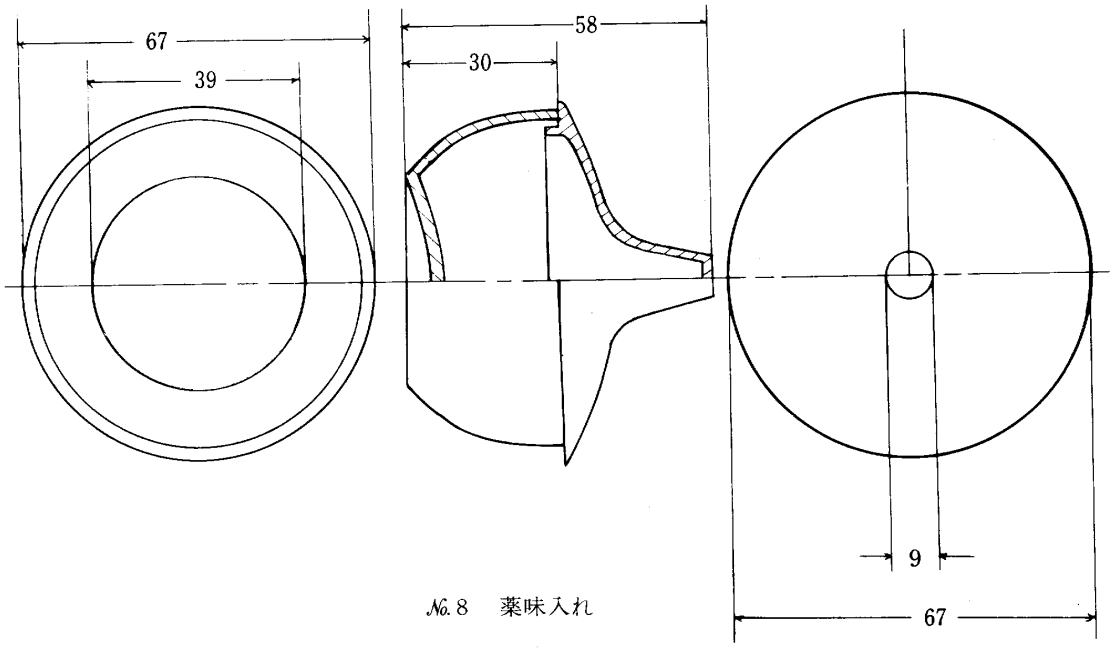
№5　陶磁器ＳＰセット



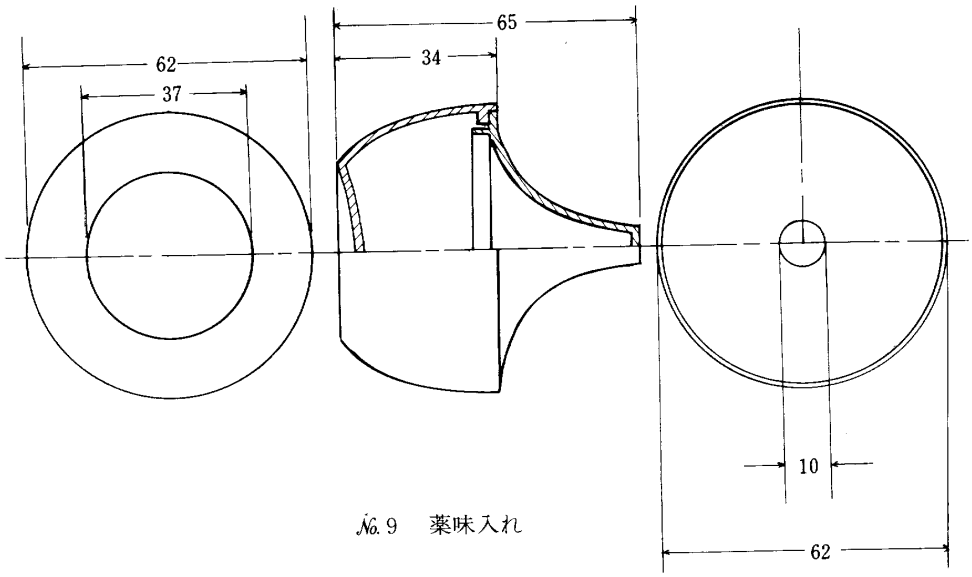
№6　薬味入れ



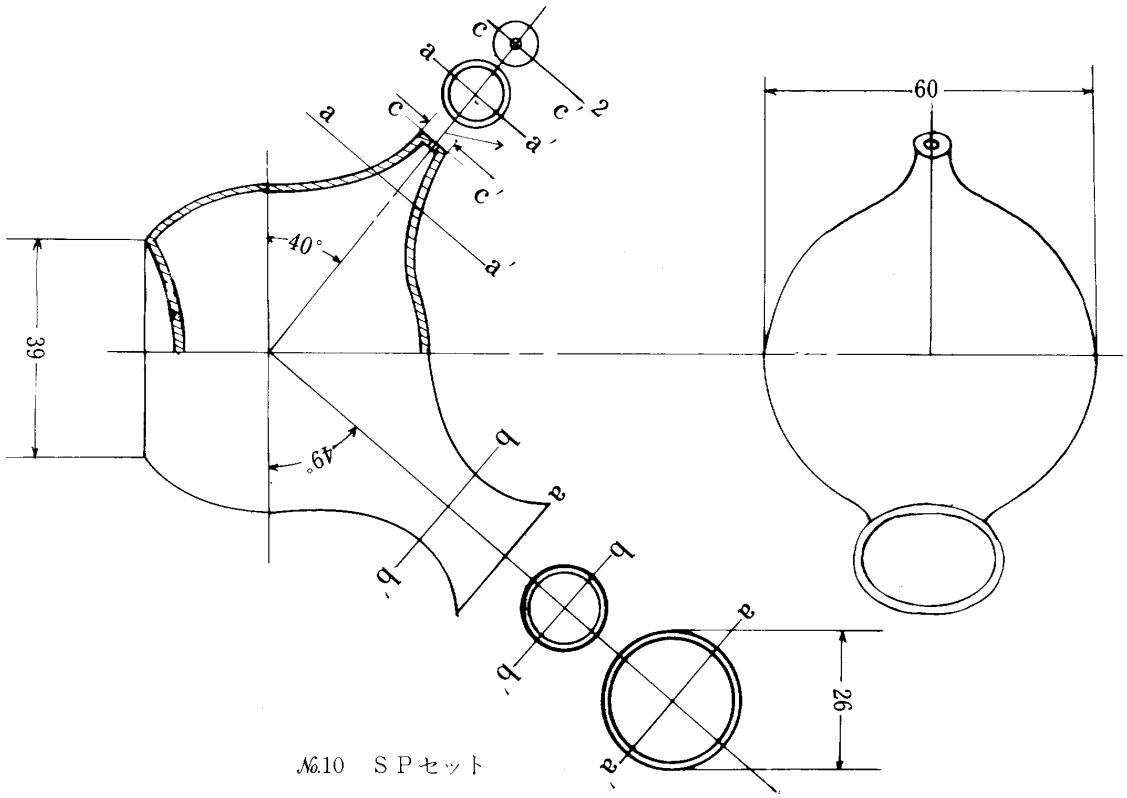
№7　ＳＰセット



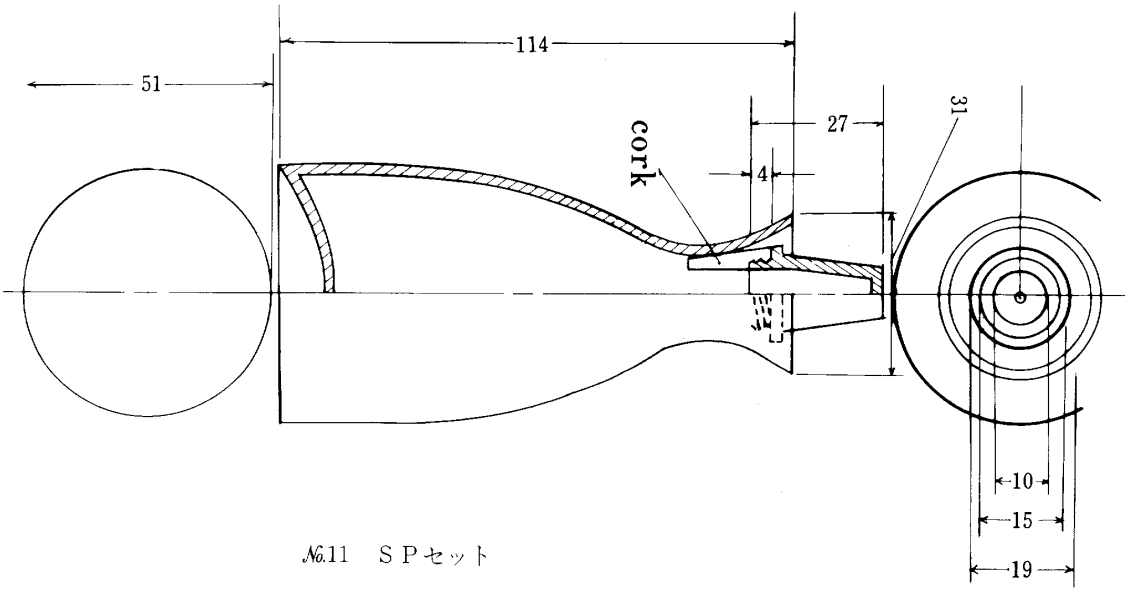
№8　薬味入れ



№9　薬味入れ



№10　ＳＰセット



№11　ＳＰセット